「喜悦の盈満」

第六講「カナン入国」

ヨシュア記3章15節～4章11節

第六講 「カナン入国」

一、はじめに

二、第二の機会

三、入国を前にして

四、ヨルダンを渡る

五、ヨルダン川の意味

一、はじめに、第二の機会

カナンの問題を中心に考える「きよめ」

カナンの国とは、新約の霊的な経験において私たちがたどりつくべき、
新生のもう一つ先にある霊的状態。

カナンの境界線であるカデシバルネヤには信仰の危機がある。

しかし失敗して荒野をさまよったイスラエルの民は、もう一度新しいチャンスを
与えられた。そして入国することができた。

神さまは第二のチャンスを与えてくださる。

二、 入国を前にして

ヨルダン川を渡る前にしなければならなかったこと。

① 回顧と反省。 なぜこの恵みを求めてきたか、なぜ必要なのかを回顧する。

不信仰は何ももたらさない。信仰だけがいのちと勝利の道。その時どんなに困難に見えても、信仰はプラスであり必ず勝つ。

② 神への感謝。

③ 入っていく土地の正しい理解。

（1） どうしても行きつかなければならないゴール。
（2） エジプトを出たときから、神の約束によって与えられていた土地。
（3） そこで初めて、落ち着いた生活ができるように定められている。

④ 新しい指導者。 ヨシュアが表しているのは聖霊。

三、 ヨルダン川を渡る

大切なこと、しなければならないことは行動。

信仰で従おうとするときに課題がないことはない。しかし最後まで従う。
途中でやめずに最後のところまで行くとき、初めて結果が現れる。

① そこを渡ることができる秘密は、神の契約の箱の臨在。
それは主イエスの十字架の贖いと神の臨在を表している。
救いもきよめも、信仰の根拠は同じ贖いの十字架。

② きよめられるということは、一つの転機として通過すること。
成長の延長ではない。一つの状態からちがった状態に移ること。

四、 ヨルダン川の意味

きよめられる前の信仰生活と、ヨルダンを渡った信仰生活の間に横たわっているヨルダン川とは。

それが象徴しているのは「死」。

きよめとは、外的には神と共にある祝福と幸いの道であるが、内的にはおのれ（自我）が死ぬということ。

それは結局自己の「意志」の問題。感覚や思いではない。
神の前に、どんなことであっても、自己の権利の主張権を放棄すること。

これをするときに、ほんとうの安息が来る。

自分が知っている範囲ではなく、神さまが知っておられる範囲で皆献げる。

まとめ

「きよめ」とは、

神さまが知っておられる範囲で私のすべての主張権を神さまにお渡しすること。それは転機的な経験

そのときに聖霊は奇跡を行って、神さまのみむねだけに生きる者としてくださる。